

もふもふ獣人に転生したら

最愛の推しに溺愛されています



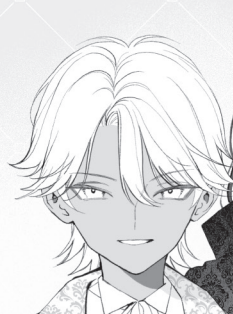
カイト

次期近衛騎士団長の  
最有力候補で、  
BLゲームの攻略対象。



アリアス

BLゲームの主人公。  
前世の記憶をもつ  
転生者。



ルアル

ルディア帝国の  
帝太子で、  
BLゲームの  
攻略対象。



ノア

筆頭高位貴族の令息で、  
BLゲームの攻略対象。



セバ

ジェディア家の家令長で、  
ゲオルグの恋人。



ゲオルグ

ジゼの父親で、  
筆頭上位貴族  
ジェディア家の当主。



リト

獣人の男の子。  
最愛のジゼに会った衝撃で  
前世の記憶を思いだし、  
彼の家で従僕として  
働くことに。



ジゼ

BLゲームの攻略対象で、  
前世のリトの最愛の推し。  
違法に労働させられていた  
リトを救いだしてくれた。

序章 もふもふ獣人に転生しました

「グズグズするな！」

雨を斬り、鞭むちが鳴る。暗雲の切れ間から射す、冬の夕日を弾くように、僕のちいさな身体が、吹き飛んだ。

雪白色の耳としっぽが濡れそぼり、泥にまみれたガリガリの身体が、採石場の砂利だらけの水たまりに落ちてゆく。泥水に映った僕の陽の光色の瞳が、落下の衝撃で生まれた波紋なみずかに歪ゆがんで消えた。

『リト』  
自分でつけた名を呼んでくれる人は、ひとりもない。獣人同士は会話をすることさえ禁じられている。人間が獣人を呼ぶときはいつも『お前』か『おい』だ。

人間がいて精霊さまもいらっしやって、伝説には龍や魔王まで存在する、魔法に満ちたこの世界は、僕たち獣人に、とても厳しい。

「ごほ……！ ぐ、う……」

石の欠片かけらが、唇を切った。

……息が、くるしい。

「なにやってる！ 立て！」

——もう、無理だよ。

骨の浮いた手足で、泥に染まる身体で、僕は雫が落ちてくる真つ暗な空を見あげる。

いくら力もちの獣人でも、五歳の身体で身の丈の二倍はあろう大きさと、体重の十倍を超える重さの浮雪石を運べるわけがない。文句は泥水と一緒にこぼれ落ち、声にはならなかった。口答えすると、またぶたれる。

痣だらけの僕は、いびつにしか動かない足を引きずり、切りだされた石材を背負う。

ルディア帝国帝都に立派な劇場を造るための石材を、採石場から帝都ゆきの魔列車に積みこむたびに、僕の身体は壊れてゆく。

雪が混じりはじめた冷たい雨が、傷に染みる。ぬかるむ道に、足がすべる。

「うわ、獣人だ」

「汚ねえ」

「くっさ！」

「気もちわりい」

懸命に石材を運ぶ僕をめぐけて、侮蔑と嘲笑が槍のように降ってくる。

ちいさな僕の背骨がきしむ。

骨が折れたって、息絶えたって、誰も気にしない。

獣人はこの世界では家畜よりもひどい扱いを受ける。人権なんて、どこにもなかった。

……生きるだけで精一杯だったから、両親は僕を捨てたのだろう。

僕はおかあさんとおとうさんの顔を知らない。自分がなんの獣人なのかさえも知らない。

ふわふわの耳と、もふもふの大きなしっぽにしまし模様はないけれど、虎の獣人だったらいと願っていた。大きくなったら、きつとつよく立派になって……そう、夢を見ていた。

けれど僕は大きくなることなく、ここで息絶えるのだろう。泥水にまみれ、重たい石に押しつぶされ、使い古されたボロ切れみたいに殺される。——それが獣人の生涯だ。

「あ……………」

ずっと懸命にがんばってくれていた膝はもう限界だったのだろう。突然、力が抜けた。くずおれた僕のうえに、背負っていた巨大な石が押しかかる。

——終わりだ。

巨石はすぐに、僕を押しつぶすだろう。

……命が終わる。心配なのは、残すことになるちいさな獣人の仲間たちだけだ。希望も夢もなんにもない僕には、迫りくる最期は救いにさえ思えた。

——さよなら。僕をきらいだった世界。

目を閉じたのに。

……………あれ……………？

……………重く、ない……………？

瞬いてうえを向いた僕は、石材にそえられた手に気づいた。誰かが支えてくれている。

——人間だ！ 早く起きて背負わないと、またぶたれる。  
あわてて起きあがろうとした僕を背に、その人間は力を籠めて浮雪石を監督官のほうへ落とした。  
ドオオオオン——！

土煙をあげながら落ちた巨石が、大地をえぐる。  
「な、なにしゃがる！」

駆けてきた監督官に、人間は青い瞳をつりあげる。

「獣人を強制労働させることは、帝国法で禁じられている。知らぬのか、貴様」  
大地の底から響くような声だった。

透きとおるような空色の瞳が、凍てついた。

盛りあがる筋肉に覆われた、見あげるほど大きな監督官を、まだ少年なのだろう小柄な人間が睨める。

「……だ、だめ、だよ……！ あいつ、つよい。あの……でも……ありがとう」

よるよる起きあがった僕は胸に手をあて、ルディア帝国式に心からの感謝を捧げた。

泥水で汚れた耳としつぽが、ぺしやりと揺れる。

「……っ！」

僕を見て胸を押さえた少年のまなじりが、ほんのり紅い。

「ど、どうしたの!? くるしい?」

あわてる僕を突き飛ばした監督官は鼻を鳴らした。

「帝国法なんざ守る輩がいるもんか。獣人はな、人間じゃあ、ねえんだよ。最期までこき使っているって決まってるのさ！」

ブウン——！

ふりあげられた監督官の拳に、跳びあがる。

「逃げて——！」

前に出ようとする僕に、かすかに瞳を見開いた少年は微笑んだ。

みぞれさえも弾くように少年の月の光色の髪が輝いた、次の瞬間、監督官が吹き飛んだ。

「責任者を出せ。帝王陛下に堂々と背くんだ、首を刎ねられる覚悟くらいあるだろう」

言い放った少年がかかげた紋章に、駆けつけたもうひとりの監督官が目を見はる。

「帝国、近衛騎士——!?」

「お前らの首を独断で刎ねられるくらいの権限を、俺は持っている。さあ、首を出せ」

「ひいイイ——！」

泣いて逃げ去る監督官と、目の前にいる月の精霊のように輝く少年を見あげる僕の意識が遠くなる。

——ああ、これはきつと、最期に見えるという幻なんだ。だって、こんな夢みたいなこと、あるわけがない。

最愛の推しを、ちっちゃくしてみたみたいな少年が、息絶える間際に僕を助けてくれるなんて。

……おし……おし……?

……オシって、なに……？

………推し………？

「はうあ！」

覚醒した——！

「あ、あの、僕、リトっていいいます。あの、あの、あなたのお名前は……？」

そうっと僕は、少年を見あげる。

「ジゼ」

その名は、清きよかな雫のように胸に落ちた。

「……ジゼ・ディオ・ジエデイス……？」

僕のつぶやきに、透きとおる空色の瞳が、見開かれる。

「どうして、俺の名を？」

……え……？

——え、ほ、ほんとうに、本物——!?

ジゼは、前世の僕の最愛の推しだった。

——ち、近い。十代になったばかりくらいなの、ちっちゃくてかわいすぎる最愛が、近い、近い、近い——！

ぼうぜんと僕は目の前の推しを見あげる。

最愛の推しに会えた衝撃で、前世の記憶がよみがえったようです？

## 第一章 最愛

次々と湧きあがる記憶の渦にのまれるように、僕は泥のなかに倒れた。

その瞬間、鞭で打たれた痕をこじあけるような衝撃が、ちいさな僕の身体を貫いた。

『大地には怖い魔素が潜んでいることがあるんだ。傷口があるときは、決して土や泥にさわっちゃいけない。魔素が身体の中に入りこんだら、おしまいだ。獣人にとって、命が終わることは、救いかもしれないがね』

焼けつく痛みで倒れた僕は、こっそり獣人のおじいちゃんが教えてくれたお話を思い出す。

——熱い。痛い。指先まで、燃えるようだ。

泥に浸かり、起きあがることさえできない僕を、ジゼはためらうことなく抱きあげてくれた。

……頭の芯がしびれるような、いい香りがする。

「リト……！」

最愛が、僕の名を呼んでくれる。僕が、自分でつけた名を。

……え、と……僕の名は………り、と……？

……僕は……生まれてすぐに捨てられた。拾ってくれたのは、獣人を強制労働させて使いつぶす組織だった。人間よりも成長が早い獣人は、ちよっとした荷物なら一歳で運べるようになる。

一歳から僕は働き、五歳で使いつぶされて息絶える、よくある獣人生をたどり……あれ……？  
……その前の、記憶がある……？

そうだ、前世だ！

つかもうとすると逃げるように霞む記憶を、懸命に手繰り寄せる。

ひとり暮らしをしていたワンルームの薄暗い部屋で、のびたカップラーメンの麵がふくらんでいる。モニターには月の光のようにきらめく髪に、空のように透きとおる瞳の青年が映っていた。

『ああ、ジゼさま！』

ジゼのごほうびスチルに頬を火照らせ、目をうるませ、ぼさぼさの髪で、ぐるぐるの瓶底眼鏡でもだえているのは——前世の、僕………？

名前は、なんだったろう。どんな風に生まれて、どんな風に生きたのだろう。……分からない。分かるのは、いつだって画面の向こうの最愛の推しを愛でていたことだけだ。

……ああ、そうだ、前世の僕はBLゲームを愛していた。

三次元の男性には、怖くて思いを寄せることさえできなかった。男性に惹かれることをはずかしく思うことなんてないのに、堂々と自分のセクシュアリティを誇つていいのに、指弾されたらとおそろしくて、夢のようなBLゲームに逃げこんだ。

ジゼ・ディオ・ジェディスはBLゲームに出てくる攻略対象のキャラクターで、最愛の推しだった。グッズをすべて買いあさり、抱き枕を八つも購入し、いつも一緒に眠っていた。

自分の名も、どんな人生だったかも覚えていないのに、最愛の推しのジゼのことは、抱き枕のへ

たり具合まで覚えてるってどうなの!?

熱い痛みにもまれるように、驚愕さえも遠くなる。

「リト！」

最愛が、僕の名を呼んでくれる。

……ああ、そうだ。僕がつけた、僕の名だ。

\*

ぼんやり、まぶたが開く。生きていることに驚いた僕は、瞬いた。

ドロドロだった身体は清められ、ふかふかの寝台に寝かされていた。薄暗い部屋を、窓の向こうから射しこむ月明かりが照らしている。宿屋だろうか、暖炉で魔導具の炎が火花を散らした。

「……気がついたか」

月影にきらめく短い髪を揺らし、心配そうにジゼが僕の顔をのぞきこむ。

「俺は治癒魔法が使えない。この町には治癒士がおらず応急処置しかできなかった。……すまない」

ちいさな声に、跳び起きた僕は首をふる。

「あ、あの、助けてくださって、ありがとうございます。寝台を汚しちゃって、ごめんなさい」  
ふかふかの布団から抜けだそうとする僕を、やさしくジゼは止めた。

「ひどい怪我<sup>けが</sup>をしている。足は神経が壊れて……早く治療魔法を受けないと、きみの足は……」  
「獣人は五歳で殺されるんです。五歳の僕はもう、寿命です」

こっそり僕にお話をしてくれた、やさしい獣人のおじいちゃんは、皆の憧れだった。  
最愛の推しが、かなしい思いをしないように微笑むと、ジゼの顔が歪む。

「俺は、知らなかった。獣人の子がどれだけ劣悪な環境で労働を強いられているのか、なにも」  
「……獣人は、人間じゃないから」

やさしい推しが、つらい思いをしないようにと紡いだ言葉だった。反論しようとしたのかもしれない、口を開いたジゼは、僕の痣<sup>あざ</sup>だらけのガリガリの身体に改めて気づいたように、息をのむ。言葉<sup>ことば</sup>を失くしたように、唇を噛んだ。

「……ご、ごめんなさい、僕、帰ります」

いよいよ動かなくなってきた足を引きずり、寝台を降りようとする僕に、ジゼは顔をあげる。

「きみに、こんなひどい労働を強いる両親のもとへ？」

きよとんとした僕は首をふった。

「僕、捨て子です。名前も自分でつけました。あなたが呼んでくださって、うれしかった。はじめて、名を呼ばれたから」

火照る頬で、笑う。

「……っ」

あたたかな腕に抱きしめられた。涼やかなジゼの香りにつつまれる。

熱い痛みを超える、とろけそうな恍惚<sup>こうご</sup>のなか、かすかにふるえるジゼの肩に、そっと僕は指をのばす。  
最期に、最愛の推しに会えるだなんて、夢に違いないから。

あなたの背を、ふるえる手で抱きしめる。

「ありがとう、ジゼさま」

熱を帯びた唇で、そっと、ジゼの胸にふれるように、ささやいた。

獣人を助けただなんて、身分の高いジゼにとっては醜聞<sup>しゅうぶん</sup>にしかならない。ジゼの腕を離れ、一刻も早く部屋を辞そうとしたとき、いかずちに撃たれたように僕の身体が痙攣<sup>けいれん</sup>した。

火のように、息が熱い。引きつった唇が、動かない。硬直した身体が倒れこみ、床に激突する寸前、後ろから腕がのばされた。

「リト——！」

最愛の悲鳴に、心がつぶれる。

最期に推しに会えて僕はしあわせだけれど、ジゼに悲嘆を押しつけたただけだなんて、最低だ。

這<sup>は</sup>つてでもこの場を離れて、ひとり最期を迎えたいのに、指先までもがふるえはじめた。激しすぎる痛みで迎える最期に、しょんぼりする暇もない。息が、できない。

夜中なのに、僕がくるしむあいだにジゼが医士を呼んでくれたらしい。駆けつけたおじいちゃん  
医士は獣人の僕に息をのむ。獣人を診察するのはじめてなのだろう、こわばった頬で僕を診てくれた。

「これは……鞭でぶたれて、泥に落ちたときに、悪質な魔素が身体の中に入ったようです。獣人はほとんどの魔素に耐性がありますが、この子はろくに食べさせてもらえなかったのでしょうか、抵抗力がない。この町に治療士はいません。残念ですが……」

首をふる医士に、ジゼは目をむいた。

「どういうことだ!？」

「治療法は、ありません。命は、あとわずかです」

「——っ!」

ちいさなジゼの顔が、歪む。

そんな顔をさせたくないのに。笑っていてほしいのに。指先さえ、動かない。

「……ご、め……」

ごめんなさいさえ、言えなかった。あふれる僕の涙を、ジゼの長い指がぬぐってくれる。

「特権を使う。先づれを飛ばせ」

まだ幼いののに低く響く敵しい声に、部屋の隅で控えていた従僕が息をのむ。

「獣人のために、筆頭上位貴族たるジゼさまが!? なりません!」

凍りつくようなジゼの瞳ににらまれ、悲鳴をあげた従僕はすぐに押し黙った。

「サザを出せ。俺が行く」

「……は!」

駆け去る従僕を背に、ジゼは動けなくなった僕の身体を毛布でくるんでくれる。

「帝都まで戻る。——頼むから、生きてくれ」

かすれた声とともに、抱きあげられた。

月影色の馬にジゼが跨り、毛布にくるまれた僕をもうひとりの従僕から受けとる。

「……ジゼさま」

非難よりも心配を色濃く浮かべる従僕に、ジゼは手をあげた。ジゼのふくらはぎが、馬の腹をしめつける。

「夜分にすまないな、サザ。駆けてくれ」

サザと呼ばれた馬はひと声いなくなると、闇を裂くように駆けだした。

熱に途切れる息で、僕はジゼを見あげる。

研ぎ澄まされた空気をまとう、凍てつくようなまなざしのジゼは冷たく見える。——でも、ほんとうは、とびきりやさしい。目の前で最期を迎えようとしている獣人を、放っておくことができないほどに。たとえば、その行動がジゼの評価を地に落としてしまうのだとしても。

「獣人に、こんなことをしては、いけません」

『お会いしなければよかった』

『ご迷惑ばかりおかけして、ごめんなさい』

なにひとつ、声にならなかった。ジゼに抱えられた僕は、引きつる頬を彼の胸に寄せる。

「……」

——ごめんなさい。

言葉のかわりにこぼれ落ちてゆく僕の涙で、ジゼの胸が濡れていく。

「生きてくれ。……お願いだ」

ささやきが、僕のふわふわの耳を揺らす。

霞みゆく視界に映る、手綱たづなを操るジゼの指が、ふるえている。

「こ、このような夜分に、いくら筆頭上位貴族ジェデイス家の次期当主、ジゼさまであられましても、あまりにもご無体な——ヒ！　じ、獣人ですか!？」

悪魔を見たかのような声をあげたのは、灯籠とうろうをかかげた白い寝衣のおじさんだ。へにやりとした、とんがり寝帽子の向こうに、花々や樹々の彫刻で彩られた白亜の御殿がそびえ立つ。

獣人は近づくだけで殺されてしまいそうな鋼鉄の門を越えたジゼは、毛布にくるんだままの僕をサザの背に置く。馬から飛び降り、また僕を抱えて降ろしてくれた。

「帝都への転移を。今すぐ頼む」

まだ幼いジゼと、その腕に抱えられたさらに幼い僕に、とんがり帽子のおじさんは跳びあがる。

「ルディア帝国が誇る魔術の結晶たる転移門を、じ、獣人に使うなど、ゆ、ゆるされることではありません！　王族と貴族の最高位であられる方々や、陛下と次期帝王の側近の方々しかお使いにれないのですよ!」

「責はすべて俺が負う。治癒士に今すぐ見せないと、リトの命は——!」

ジゼの気迫に圧されるように、おじさんがあとずさる。

「頼む」

胸に手をあてたジゼが、膝を折る。ルディア帝国で心からの気もちを表す真摯な敬礼だ。本来ならば筆頭上位貴族の次期当主であるジゼが平民に向かつて行うなど、ありえない。

息をのんだおじさんの目が、左に右に、さまよった。

「……ジェデイス家の次期当主に、私などの中位魔法士が歯向かえるはずがございません。——そういうことで、よろしいですか」

「無論だ。……ありがとう」

ジゼのちいさな声に跳びあがると、魔法士のおじさんは真っ赤な頬で手をあげた。

「他の者が来ないあいだに転移門を開きます！　お早く!」

見あげるほど高い白石の扉に、ゆたかに茂る樹と咲き誇る花の向こうに舞う小鳥が刻まれている。魔法士の指がふれた瞬間、あふれる魔力に満たされた小鳥が、さえざるように輝いた。

音もなく、厚い扉が開きゆく。ふくよかなお腹を押しこむように、その隙間に入った魔法士は、ジゼを招いてすぐ扉を閉める。輝きの消えた扉が誰も通さぬいかめしさで、後ろを塞いでくれた。

とんがり帽子とお腹を揺らして駆ける魔法士のすぐあとに、毛布にくるまれた僕を抱えたジゼが続く。魔力をまもって輝く魔法士の指が、驚くほどの速さで次々と扉を開け、最奥へと導いてくれた。

たどり着いたのは、魔力に満ちた部屋だった。白石の天井から壁、床にまでふしぎな紋がえがかれ、淡い光を放っている。

「こちらへ！」

魔法士に床の中央で輝く巨大な紋様を示されたジゼは、僕を抱えたまま進み出た。ジゼの足が魔紋にふれる。ふしぎな言葉を紡ぐ魔法士の唇からこぼれる、聞いたことのない旋律が、魔力の部屋に満ちてゆく。

「緊急転移、緊急転移！ 帝都転移門に告ぐ。ヌオム郡ビダ町より帝都への転移をロタ・ホイが実行する。ジゼ・ディオ・ジェディスさまの緊急申請である！ 帝都転移門、すみやかに応答せよ！」

ロタと名乗った魔法士の声に応えるように、部屋中の魔紋が輝きはじめる。ロタからあふれゆく魔力に命を吹きこまれたように、ゆるやかに魔紋が明滅した。

「こちら帝都転移門、ジゼ・ディオ・ジェディス殿の魔紋確認」

涼やかな声が、すぐ傍から聞こえた。前世の記憶にある電話よりも雑音のない、澄んだ音だった。「もうひとつ登録のない魔紋があるが、何者か」

聞いただす声が厳しく響く。ロタの喉が、ごくりと鳴った。

「ジゼ・ディオ・ジェディスさまの、お連れさまである！」

つかえることなく、いかめしく答えてくれたロタの顔は、真っ青だ。僕を抱きしめているジゼの腕が、かすかにふるえる。はるか遠くにある帝都からとは思えないほど明瞭に、吐息が聞こえた。

「……二名の緊急転移、ルアル・シ・ルディアの名のもと認可する」

告げられた名に、ジゼもロタも僕も硬直した。帝国の名を冠することができるのは――

「なっ――!?!」

うるたえるロタを遮るように、涼やかな声が続く。

「帝都転移門、開きし。ヌオム郡ビダ町転移門と連結――完了」

大きくふるえたロタは、ひとつ息を吸い、とんがり帽子を揺らして声を張りあげる。

「ロタ・ホイの名のもと、帝都への転移を実行する！」

まばゆく輝く魔紋にふれたロタの手から魔力があふれ、魔紋に命を宿しゆく。

「転移します！ どうぞ、お氣をつけて！」

かすかに目をみはったジゼは、やわらかに微笑んだ。

「……ありがとう、ロタ」

跳びあがり、真っ赤な頬で大きく手をふるロタが、輝く魔紋の向こうに消えてゆく。

――ジゼと僕は、光にのまれた。

あふれる光の先に現れたのは、先ほどと似た魔紋がえがかれた部屋だった。ビダ町の御殿も僕が見たことがないほど、ふしぎな魔力に満ちていたが、この部屋は桁違いだ。天井や床、壁はもちろん、柱にまで、こまやかな彫刻が施されている。それらすべてが魔紋なのだろう、部屋中が命を宿しているかのように輝いていた。

ロタとおそろいのとんがり寝帽子をかぶった、つややかな褐色の肌の少年が、僕を抱いたままのジゼに唇の端をあげる。帽子からこぼれる陽の光色の髪が、あふれる魔力に、きらめいた。

「おかえり、ジゼ」

「なぜ真夜中の転移門に、次期帝王がいる？」

ジゼの低い声に、僕はふるえた。前世のBLゲームの知識がなくても、知っている。ルアル・シ・ルディア——ゼフィロア大陸に君臨するルディア帝国の次期帝王だ。

「先ぶれを出しただろう。こんな時間にジゼが緊急転移だなんて、おもしろいことに違いはないと思っ駆けつけてやったんだ」

胸を反らしたルアルは、ジゼの腕のなかの僕をのぞきこむ。

「俺が来なきや、今頃お前の首が飛んでるぞ」

得意げに目をほそめるルアルに、ジゼの凛々しい眉が寄る。

『ごめんなさい……!』

言いたくも言えない僕を守るように、ジゼは僕を抱きよせた。

「……感謝したくなくなる、にやつき具合だな」

「いいことを思いついた」

ルアルの形のよい唇が弧をえがく。

「俺つきの治癒士を貸してやる。帝都一の腕だ。助かるかもしれない」

ジゼを映すルアルの瞳がきらめいた。

「その子が助かったら、ジゼは俺のものになれ」

のぼされた指が、ゆるりジゼの顎をなでる。

「ジェDIS家の治癒士も世界に誇る腕だ。もう到着した。よって辞退する」

凍てつくまなざしで答えたジゼに、ルアルが喉を鳴らして笑う。

「残念だ」

高熱で意識さえ霞みゆくのには、僕はBLゲームの攻略対象をふたり同時に見られたことに、ときめいていた。今にも息絶えてしまいそうなのに、萌えている場合じゃない。分かっている。でも目の前に、スチルよりふくふくほっぺの最愛の推しと、めちゃくちゃかっこいい次期帝王がいるんだよ！

ずっと会いたかったふたりの傍に、迷惑しかかけていないことを思うと涙がこぼれる。

気づいたジゼが僕を抱きよせてくれるのを遮るように、白くそびえる扉が蹴破られた。

「ジゼさま、ただいま参りましたアア！ まさか、まさかジゼさまが、お怪我を!？」

栗色の髪をふり乱して駆けこんできた十代なかばくらいの少年が、緑の瞳を揺らして絶叫する。

「敬礼を、テデ」

テデと呼ばれた少年は、ジゼの視線の先を追って固まった。胸にあてられた手が、ふるえている。

「……こ、これは……次期帝王におかせられましたは、ごきげん麗しゅう……」

「お前のあるじに、ふられたところだ。まったく麗しくない」

鼻を鳴らすルアルに、テデの笑みが引きつった。ジゼがテデをかばうように前に出る。

「おしかりなら、俺に」

僕を抱えたまま膝を折るジゼに、ルアルはつまらなそうに目をほそめた。

「その氷のかんばせが、崩れるところを見たかったんだがな」

ルアルの長い指が、ジゼの頬をなでる。

「あまかったようだ」

鼻がふれあうほどの距離でささやいたルアルの手が、ジゼの胸を押す。

「行け。見なかったことにしてやる」

ルアルの言葉に息をのんだジゼは、僕を抱えたまま床につくほど深く膝を折った。

帝王陛下と次期帝王にのみ捧げる最敬礼だ。

「まだ見習いの身ながらたまわった近衛の紋章も役に立ちました。ルアルさまに、感謝を」

敬礼を解くよう手をあげるルアルに、顔をあげたジゼの唇の両端がほのかにあがる。

「笑っ……!?」

微笑みを確かめるようにのぼされたルアルの指を、かるやかにジゼはかわした。

輝く月の光色の髪をひるがえしながら、ジゼの唇が笑みをえがく。

「ありがとう」

口元を手のひらで覆ったルアルの耳が、紅く染まった。

「……っ！」

ふたたび膝を折ったジゼは僕を抱きなおすと、テデをうながし転移門の部屋を出た。御殿を駆け抜け、テデが乗ってきたのだろう馬車に飛び乗ると、毛布にくるまれた僕を座席にそっと横たえてくれる。

「テデ、一刻も早く治癒を」

ようやく僕の存在に気づいたらしいテデが、目をむいた。

「じ、獣人!? ジゼさま、これは——」

「責任は俺が負う。……頼む」

胸に手をあてるジゼに、息をのんだテデは首をふる。

「ジゼさまが懇願なさることなど、ございせん！ 尽力します」

小柄なテデが、こわばる顔で、僕に近づいた。人間が獣人を忌避するのは、強大な力と凶暴性をおそれることだという。テデは僕が噛まないか、牙をむかないか確かめるように、そっと指の先で、僕の頬にふれた。その熱さに驚いたように、僕の目をのぞきこむ。

「……これは……魔素が侵入している。治癒士でも救えるかどうか……」

僕の首を、足をさわり、背中の中の傷を確認したテデの声が沈んだ。

「質たちのわるい魔素です。侵入してから、かなり時間が経ってる。この傷は、時間との勝負です。助かるかどうかは二分……いや、もう一分もないか……」

「俺の魔力を」

差しだされた手に目をむいたテデは、ジゼの指を押しいただき、そっとにぎった。

「ああ……! ぼ、僕、がんばります、ジゼさま!」

うるんだ瞳で見つめられたジゼが、テデの手をにぎりかえす。

「つらくなったら言ってくれ」

言葉とともに、月の光にきらめくジゼの髪が舞いあがり、身体からあふれる青い魔力が、馬車を

染めた。つながる指から、テデへと魔力が流れこむ。

「……っ！」

一瞬、恍惚の表情を浮かべたテデは、すぐに我にかえったように唇を開いてふしぎな言葉を唱えはじめた。

冷たい冬の夜に、やわらかな旋律が響いてゆく。

テデの身体からあふれる緑の光が、僕の身体をつつんだ。

あたたかなあとにわずかな冷たさを感じるのは、ジゼの魔力が混ざっているからだろうか。くるしかった呼吸が、ほんの少し楽になる。燃えるような背中への痛みが消えてゆく。

こわばっていた唇が動いた。焦点の揺れる目で、僕はテデとジゼを見あげる。

「……ご、め……なざ、い……」

あふれる涙に、テデの瞳がとまどったように、さまよう。ジゼは唇を噛んだ。

「……こんなになるまで、助けられなくて……すまない」

かすれる声でささやいて、ふるえる僕の指をにぎってくれた。

まぶたの向こうに、光が降る。冬の淡い朝日が降ってくる。

夜のあいだに馬車で移動したらしい。ふかふかの寝台に僕は横たえられていた。

……まさか、ジゼの邸しやだろうか。獣人を筆頭上位貴族の住まいにあげるなんて、大変な醜聞だ。

あわてて起きあがろうとした僕は、なにかに引っぱられて止まる。寝台の傍に置かれたちいさな

丸椅子に座ったジゼが、僕の手をにぎっていた。

——ずっと、僕と手をつないでいてくれた……？

「……っ！ テデ！」

隣の寝台で仮眠をとっていたのだろうテデが、ジゼの呼びかけに飛び起きる。

「お、おはようございます、ジゼさま！」

「リトを！」

ジゼにうながされたテデの瞳は、僕が起きたことに気づいたように見開かれる。

「おお、目覚めましたか！ 峠は越えましたね。気分はどう？」

心配そうに、のぞきこんでくれる。起きあがろうとした僕は、ふたたびジゼの手に止められた。

「重態なんだ。動かないで」

「……でも……め、いわ、く……」

まだ動かしにくい口で告げたら、ジゼは首をふった。

「きみに、生きてほしい」

冬の陽にきらめくジゼを見あげた僕は、そっとジゼの指をにぎる。

「……ど、して……っ？」

澄みわたる空色の瞳が瞬いた。

「生きてほしいから」

ぼかんとする僕とテデに、ジゼの頬が、かすかにふくれた気がした。

「……獸人、なの、に……？」

「あたりまえだ！」

痛いくらい、手をにぎってくれる。

僕は、最愛の推しを見あげる。

前世の僕は、硬い画面の向こうを見つめていた。BLゲームはつくり物のお話で、異世界転生なんて起こるわけがないと分かっていたのに、それでもずっと、ジゼの傍に行きたかった。

——あなたにふれられたら、なにもいらぬ。

祈るように願っていたジゼが今、僕と手をつないでくれている。想像していた、なめらかで吸いつくような指じゃない。まだ幼いのに厳しい鍛錬をかさねているのだろう、荒れて硬い手だった。

さらさらの髪が、僕の頬をくすぐった。

涼やかなのに、とろけそうに甘い香りがする。氷のように透きとおる瞳に、僕を映してくれる。

最期に最愛の推しに会えたから、僕はもう息絶えても構わないと思っていた。寿命だし、仕方ない。最愛の推しの腕のなかで命を終えるなんて、最高にしあわせだと。

なのに命が繋がったら、傍にいたら迷惑にしかならないと分かっているのに、蔑まじまれることも分かっているのに。

——あなたの傍で、生きたい。

「……ごめ……なしあ……」

涙が、あふれる。

「謝るな。……お願いだから」

僕の涙をさらうように、ジゼが抱きしめてくれる。

胸が、熱い。

唇が、ふるえる。

「……ジゼしやま……」

愛しくてたまらない名を、口にする。

ぎこちなくしか動かせない腕を、そっとジゼの背にまわした。前世からずっと愛していた人を、そっと、そっと抱きしめる。

「……おそば、に……いた、い……で、し……」

ささやきが、ジゼの胸にとけてゆく。

ふかふかの寝台で目が覚めるたび、これは僕の夢じゃないかと思う。

「……いひゃら」

現なのか確かめるために引っぱる頬は、いつも痛い。

洗ってもらってふわふわになった僕の耳が、ペしよりと垂れた。

——BLゲームの世界に転生して、最愛の推しのジゼさまに会えるなんて、夢みたいだ。

あのあと僕は、帝都にあるジゼが住むお邸の一室で寝起きすることをゆるされた。この世界で、いや前世を含めてもはじめて体感するふかふかの寝台には天蓋てんがいまでついていて、陽の光をやさしく

遮ってくれる。

以前は寝台はおろか毛布さえ、もらえなかった。冷たく硬い床で、獣人の皆でくっついて眠っていた。それでも岩や砂利のうえで眠るより、ずっとよかった。そんな生活があたりまえだったのに、今は机と椅子に衣装棚、ちいさなお風呂まで完備された部屋を与えられている。獣人としてはありえない待遇だ。

ジゼとテデが毎朝、毎晩、様子を見にきてくれる。扉からジゼの髪がのぞくたび、僕のしつぽは、ぶんぶん揺れた。

最愛の推しが、目の前で生きている。

なめらかに動いて、月の光色の髪がさらさら揺れて、澄みわたる空色の瞳で僕を見つめてくれる。

——ぜったい、夢だ。

そう思っただけでひっぱる頬は——

「……いひゃい」

痛みにしよげる耳と反対に、ふあふあになったしつぽは最愛に会えたよるこびで揺れている。

ちいさな顔を手のひらで覆うジゼの耳が紅いのは……気のせいかな？

「おあよ、ごさまし、ジゼしゃま」

「おはよう、リト。身体の具合は？」

「元氣、でし」

口はちよつと、動かしにくい。五歳の僕は、もう少しちゃんと話せるはずなのに！

しょんぼりする僕の頭をぼふぼふしたテデが、診察してくれる。

「神経を侵す魔素が身体に入ったんです。高熱が出て、全身が痙攣していた。人間なら助からない。命があるのはリトが獣人だからでしょう。奇跡的な回復を遂げていますから、にらまないでください、ジゼさま！」

叫ぶテデが、涙目だ。

「命、あゆ。ジゼしゃまの、おそばに、いられゆ。うれし、でし」

ぼふぼふ、しつぽが揺れる。火照る頬で見あげたら、ジゼは胸を押さえた。

「ジゼしゃま、たいへん！」

唇を手のひらで覆って首をふるジゼの耳が、ほんのり紅い？

「む、胸の病かもしれません！ さ、さっそく、診察を！」

鼻息荒くジゼの胸をはだけようとするテデを、ジゼの鉄拳が止めた。

「いらぬ」

「いひゃい！」

吹き飛ばされたテデが、なぜだかとても、しあわせそうです。

「あ、あの、ジゼしゃま、おそりえ、ながら、はちゅげん……」

そうっと見あげる僕の手を、微笑んだジゼが、にぎってくる。

「なんでも言ってくれ。どうした？」

次期、筆頭上位貴族であるジゼに獣人がお願いするだなんて、分不相応すぎるのは分かっている。

ジゼの立場や評価が地に落ちてしまうかもしれないことも、分かっている。

それでも、獣人の僕を救ってくれたジゼなら——!

「あ、あの……僕と、いしよに、働いて、た、獣人の、皆——生きて、いたら、たしゅけて、くださいあ……!」

こぼれる涙と、叫んでいた。

「僕、なんでも、しましあ……! ご恩、おかえし、すゆため、がんば、り、ましあ……! だから、どうか……! 獣人の、僕には……皆の、ために、なにも……でき、な……!」

あふれる涙で、息が、できない。

「リト……! すまない、もつと早く言えばよかった……!」

ふるえる肩を、あたたかなジゼの腕が抱いてくれる。

「生き残っていた獣人の皆は、俺とルアル殿下の直属騎士が保護し、治療院に入ってもらった。皆、リトのことを心配していた。俺の邸で治療中だと告げてある」

「……生きて、ゆ……?」

「ああ」

ジゼが、微笑んでくれる。

——僕だけじゃない、獣人の子たちも、救ってくれた。

「……ジゼしゃま……ありあと、ござまし……!」

心配で裂けた胸が、感謝であふれる。

「ルアル殿下が側近の俺を監査に向かわせ、騎士を派遣し、保護した獣人たちを治療院に入れてくださったんだ。リトが元気になったら、殿下に御礼おんれいに行こう」

「あい……!」

「獣人のちいさな子たちは、かなり衰弱していた。リトには体力があったから治療魔法にも耐えられたが、さらに幼い場合、急激に回復させると危険らしい。ゆっくり回復させて様子を見るそう。治療中に興奮させると症状が悪化するという。獣人の皆が元気になったら、会いに行こう」

やさしいジゼの言葉に、息をのむ。

——皆に、また会える……!

思うだけで、涙がこぼれる。止まらない涙を、ふるえる肩をくるむように、抱きしめてくれるのが最愛のジゼだなんて。獣人の皆を、僕を、救ってくれたなんて。夢みたいだ。

「すばらしい回復力だよ、さすが獣人!」

テデがほめてくれるほど、僕がめきめき回復したのは、おいしいご飯を食べさせてもらえたからだと思う。前世の知識に照らしてみると、今まで食べていたのは……残飯よりもさみしい、カビて腐りかけた病気になるようなものばかりだった。それが獣人にとつての、あたりまえだ。ご飯が食べられるのは、すごいことで、ひと月くらい水だけで働かされることも、ざらにあった。

体力のある獣人は、酷使しても働かせられる。人間からすると、獣人は息絶えたところで痛くもかゆくもない使い捨てだ。だから獣人たちは五歳までしか生きられない。

それなのに、僕はジゼのおかげで生きのびて、前世と比べてもおいしいと思えるご飯を食べさせてもらった。よろこんだ身体が張りきって回復してくれているのだろう。今までの分をとり戻すように。

「こんなに、ふかふか！ ありあと、ごぎ、まし！」

ふわふわの麦焼きをかじるたび、感謝に涙がにじむ。麦の粉を水と練って焼きあげる主食の麦焼きが、こんなにほわほわしているなんて。今まで食べていた、薄い板うすのような麦焼きが、遠くなる野菜をすりつぶしてつくつくってくれたのだろう、あたたかい流動食が、お腹のなかからぬくめられる。

——おいしい。生きてる。うれしい。

だからこそ、殺された皆のことを思うと、涙があふれた。

「ありあと、ごぎまし」

僕は胸に手をあてる。ルディア帝国で心からの気もちを表す仕草だ。膝を折ると、さらにていねいな敬礼になる。

涙の瞳でご飯をいただく僕に、ジゼは僕の今までの食生活を察してくれたらしい。

「たくさん食べ」

この世界では目が飛びでるほど高価な、あまいはちみつの、たっぷりかかった麦焼きを僕の唇に押しあててくれた。

はむ。

「……おいひー、でし、ジゼしゃま」

火照る頬で、笑う。耳としっぽが、ふわふわ揺れる。

「——っ！」

まなじりを紅くしたジゼが、手のひらで唇を覆った。

「……じ、ジゼさまに、『あーん』ってしてもらうなんてえエ——！」

号泣しながら絶叫するテデに、びっくりする。

「い、いまの……あー、ん……？」

そうっと聞いてみた。目をそらしたジゼの耳が、紅い。

テデが毎日治癒魔法をかけてくれ、ジゼは毎日お見舞いにくれてくれた。

冷たい冬が遠ざかり、淡い陽ざしに春のぬくもりが混じりはじめる。

やわらかな光に満たされた部屋のなかで、僕はちいさな両手をあげる。

「た、立て、た！ ジゼしゃま！」

まだ動かしにくい足は、歩こうとすると、よたついた。なんとか寝台から立ちあがり、お見舞いにくれてくれたジゼへと、懸命に足を動かす。よろめく身体のバランスをとろうと、ふあふあおのしっぽを揺らして、よたよた近づくと、ジゼは両手で顔を覆った。

「あ、あの……ジゼしゃま……僕、歩けゆ……」

……迷惑、だったかな……？

ぺしよりと垂れた耳としつぽまでくるむように、抱きしめられた。

「……よく、がんばった」

ささやくジゼの吐息が、ふわふわの耳にふれる。目の前にあるジゼの耳朶じただが、ほわほわ紅い。

「えへへ」

紅い耳をそととついたら、ジゼが跳びあがった。

「こらあア！ ジゼさまにふれるなんて、絶対にだめだからあアア——！」

叫んだテデに、頬を紅く染めたジゼが射貫いぬくようなまなざしを向けた気がしたけれど……気のせいかな？

真っ青になったテデは引きつった頬で、いかめしく告げる。

「身分の差を考える。天上におわす方だぞ」

たしなめられた僕の耳としつぽが、ぺしやりと垂れた。

「……あー」

ジゼが唇を手で覆う。でも、紅い耳までは覆えていない。

——かわいいー！

まだ幼く、かわいすぎる最愛の推しのために僕ができるのは、ジゼのしあわせを応援することだ。前世の記憶がよみがえった今なら、BLゲームの主人公と、推しがくつつくルートを開いてあげられる！

自分が推しとくつつきたいなんて大それたことは、考えない。

最愛の推しは、遠くから尊く奉るものなのです。それこそが推し！

僕は、節度あるファンを目指しています。

……でも、めちゃくちゃくつついているし、ふんふんしちゃう。

——ごめんよ！ 獣人にとって香りを吸いこむのは、とつても大切なことなんだよ！ 三次元のジゼしゃま、めちゃくちゃいい匂いする——！

耳もしつぽもよろこびで、ふりふりだ。とろけてしまいそうなジゼの香りを心ゆくまでふんふんして、うっとり恍惚に浸った僕は、気合を入れるために、ぺちりと自分の頬を両手で叩いた。

「あの、僕、ジゼしゃまの、お役に、立ちたい、でし。おそばで、働かせて、くだしあー！」

分不相応な望みなのは、痛いほど分かっている。獣人は人権さえない存在だ。ルディア帝国に名立たるジェedis家を継ぐジゼに仕えられるのは、貴族だけだ。それでもお掃除やお洗濯をするためだけにでも、お邸の隅っこに置いてもらえれば、ジゼが有利なように動けるかもしれない。大切なイベントが起こるきつかけをつくれるかもしれない。

——なにより、あなたのお傍にいたい。

懇願する僕に、ふうわり頬を紅く染めたジゼが胸を押さえた。

「や、やはりジゼさま、胸の病が!? さ、さっそく、診察を！」

鼻息荒くジゼの胸元をだけさせようとするテデを、ジゼが鉄拳で吹き飛ばす。

こぼんと咳せき払いしたジゼは、僕の髪をそとと、なでてくれた。

「では、俺の従僕に」

……じゅうぼく？ 頭をひねると、ぼんやり前世の知識がよみがえる。

このBLゲームの世界では、家令、執事、侍従、従僕の順に、えらかったはずだ。

家令はあるじの公務や領地の統治にも携たずわる。ジェデイス家当主の右腕となる家令長を筆頭に、とても頭のよい人たちだ。執事は主に邸の管理を任される。侍従はあるじの公務のお手伝いだ。

僕が指名を受けた従僕は、あるじの身のまわりのお世話を担当する。

獣人の僕がジェデイス家の従僕になれるなんて、すばらしい栄誉だ。

——じゅうぼく。お靴をみがいたり、履はかせたり、ふとこで、あたためたりする役ね！

「よろこん、で！」

——最愛の推しのお靴を、ふとこで、あたためます！

ほわほわしっぽの僕が飛び跳ねそうによるこぶ隣で、テデは目をつりあげた。

「な、なりません！ ジゼさまの従僕は中位以上の貴族の子弟と決まって……」

「おらぬ」

ジゼの氷の瞳で射貫かれたテデが沈黙する。テデに、じつとりにらまれた僕は固まった。

……従僕って、僕が思ってるのと、ちよつと違うみたいですか……？

毎日お部屋で立つちと歩く練習をする僕を、テデとジゼが見守ってくれる。

「だいぶ、歩け、ゆ！ ジゼしゃま！」

ぶんぶんしっぽでよろこぶ僕を、とろけるような笑顔でジゼが抱きしめてくれる。

「よくやった、リト」

ジゼに名を呼ばれるたび、人間だった前世の僕が霞んでゆく。

あなたの前で、あなたのために生きる、もふもふ獣人リトになつてゆく。

「ジゼさま、執務を」

僕の部屋の扉をかるく叩いた家令長の言葉に、吐息したジゼが僕の頭をやさしくなでてくれた。

部屋を出るジゼを見送る僕のしっぽも、ほふほふだ。

「リト、本気でジゼさまにお仕えるつもり？」

ふたりきりになった部屋で、テデが僕の目をのぞきこむ。

「あい！」

決意をこめてうなずく僕に、いかめしくテデは告げた。

「ひどいことを言われるよ。獣人には厳しい世界だ。周りには敵しかいない」

僕を心配して忠告してくれているのだろう、テデの気もちが沁しみみてる。

「テデしゃんも、ジゼしゃまも、おやさし、でし。僕、がんばゆ！」

ちっちゃな両手をにぎりしめる僕の頭を、なでてくれた。

「……ほんとうは教えたくないけれど。ジゼさまの従僕ができないなんて、ありえないことだから」

ほんのり赤い頬で、従僕の誓いの所作を教えてくださいました。

冬がゆき、春がめぐる。

毎日、部屋まで診察にきてくれるテデが、僕の心音と脈を確かめる。毎日、隣で見守ってくれるジゼに、テデはやわらかに微笑んだ。

「ずいぶん歩けるようになりました。体調も問題ないようです。従僕としての務めは果たせるかと」

働くおゆるしが出ました！

「テデしゃん、ジゼしゃま、ありあと、ごさまし。僕、がんばり、ましあ！」

ぽふぽふしつぽで、ちっちゃな両の拳をあげる僕に、ジゼが両手で顔を覆った。

ちいさな顔は隠れているけれど、紅い耳がのぞいている。

かわいすぎる最愛の推しにもだえたら、従僕としてジゼの執務室に初出勤です！

はじめての僕のお仕事は、ジゼのために執務室の扉をあけることでした。

緊張にふるえる指に、ジゼが微笑んでくれる。

「リトならできる」

やさしく手をにぎってくれる。

——あなたのためなら、どんなことでもできる気がする。

そうっと開いた扉の向こうから、紙と書液の香りが広がった。

聞いたところ、まだ十二歳なのに、次期当主として認められているジゼの執務室の壁には、天井にまで届く書棚が連なり、たくさんの本や書が縦に横に詰まっていた。最奥の壁にはジェディス家の紋章がかかげられ、その前に大きな執務机が鎮座する。つやつやの臙脂えんじの革張りの椅子が、お客さまを迎えるためにたたずんでいた。

ジェディス家の紋章の前で、当主であるジゼの父ゲオルグが、ジゼにかるく手をあげる。その傍らには家令長セバが、扉の近くにはジゼの侍従たちが控えていた。ジゼとテデに続いて執務室に足を踏み入れた僕を見て、侍従たちが、けがらわしそうに顔を背けた。

しょんぼり垂れそうな耳としつぽを、ぴんとして、僕は胸に手をあてる。

「リトでし。今日から、ジゼしゃまに、お任せしまし。よろしく、おねがい、しましあ！」

元気になったし、ちゃんと話しているつもりなのだけれど、口は思うように動いてくれない。テデのおかげで、ずいぶんよくなったけれど、まだ少し足も引きずってしまう。でも痛みがないのは、しあわせだ。足を出すたび激痛でよろめいていた日々が、ひどくなる一方だった涙の日々が遠くなる。テデへの感謝の気もちでいっぱい이다。

「テデしゃんの、おかげで、僕、元気に、なりましあ。ありあと、ごさまし」

いかめしささえただようジゼの執務室で、胸に手をあて心からの感謝を表す僕のしつぽが、ふわ揺れる。ゲオルグとセバとジゼのまなじりが、ほんのり紅くなった。

「リトの足と言葉の改善は見られないようだ」

ジゼの氷のまなざしに刺されたテデは、涙目だ。

「き、奇跡的な回復です！ 一命をとりとめ、歩いて、話せるようになるなんて、まさに奇跡です。おそらくジゼさまが魔力を与えてくださったおかげかと！」

疑わしそうに目をほそめるジゼの頭を、のびたゲオルグの手が、やさしくなでた。

「父上」

くすぐったそうにジゼが顔をあげる。

「テデはよくがんばってくれている。分かっているだろう、ジゼ」

「……リトのために、希少な治癒の力を惜しみなく使ってくれることに、感謝しています。ありがとうございます、テデ」

やわらかなジゼの声に、真つ赤になつて飛びあがったテデは、とろけそうな笑みを浮かべた。

「も、もったいないお言葉、ありがとうございます！」

ジゼの感謝の言葉をほめるように、ゲオルグの大きな手がジゼの背をやさしく叩く。

凛としたゲオルグは、うっとりするような色香をほのかにまとう大人の男性で、髪と瞳の色も、顔立ちもジゼによく似ている。ゲオルグもB.Lゲームに少しかだけ登場していた。生で見ると、おじさまという言葉を使うことが申しわけなくなるくらい若い。確かゲームの設定では、ジゼはゲオルグが二十歳のときの子だった。もしゲームのままなら、今は三十二歳くらいだろうか。

そうつと見あげる僕に、ゲオルグはほんのり唇をほころばせた。

……獣人を憎悪していないみたいだ。

よろこびに跳ねる耳としつぽに、ゲオルグの目じりがさがり、ジゼの目がつりあがる。

傍らのジゼの反応に、ゲオルグはちいさく笑った。

「この子をジゼの従僕にするのか」

感慨深げに顎をなでるゲオルグを、まっすぐジゼは見あげる。

「否は聞きません」

おもしるそうにゲオルグは喉を鳴らした。

「おそれながら申しあげます！ 下等な獣人をジゼさまの従僕にするなど、ジゼさまのご評判を地に落とすのみならず、筆頭上位貴族、ジェイス家の名にも泥を塗る行為かと！」

「中位貴族以上が、ジェイス家の次期当主であられるジゼさまにお仕えすべきです！」

「下等な獣人とともに、お仕えできるわけがないでしょう！」

「即刻、解雇を！」

憎々しげに僕をにらみつける侍従たちに、ゲオルグは眉をあげた。ジゼの氷の声が告げる。

「リトを蔑む者や忌避する者は罷免する。その者、すべて出ていけ」

目をむいた侍従たちが跳びあがる。

「そんな、ジゼさま——！」

侍従たちの悲鳴を背に、ゲオルグはため息をついた。

「獣人差別が帝国法で禁止されて、もう三年になる。なかなか浸透せず嘆かわしい限りだ。まさか我が邸内にまで差別する者がいるとはな」

ジゼによく似た氷の瞳がほそくなる。

「帝国法を犯した罪で、罷免する。すぐに出てゆくがいい。セバ、あとは頼む」  
「御意」

家令長セバが胸に手をあて、うやうやしく膝を折った。  
「どうして高貴な私たちが――」

悲鳴をあげる侍従たちを、すぐさまやってきたジェデイス家お抱えの衛士たちが連行していく。  
叫喚が扉の向こうに消えると、ゲオルグは唇を開いた。

「ジゼに獣人の従僕をつけるのは、我が家のみならずルディア帝国の臣民すべてに、よい啓蒙となるだろう。……しかし、魔素に侵された身か」

僕の引きずる足と、まわらぬ口を見つめるゲオルグに、ジゼは胸を張る。

「個性です」

ゲオルグの唇が、やわらかな弓をえがいた。

「守ってやれるのか」

「この身に代えて」

透きとおる瞳で、まっすぐジゼはゲオルグを見あげる。

ゲオルグの大きな手が自分と同じ色の髪を、わしやわしやなでた。

「よい顔をするようになった」

まなじりを赤く染めたジゼの肩をやさしく叩くと、ゲオルグは長身を折り曲げて僕の前にかがんだ。僕と目をあわせるために、ジェデイス家当主が、膝を折ってくれる。

「我が愛息に仕えてくれるか」

耳としつぽを、しゃんとした僕は胸に手をあて、よろめくのをこらえて片膝をつき、ジゼを見あげる。テデが教えてくれた従僕の誓い、名と命をもつて誓う、誓礼だ。

「僕を、救って、くれたの、ジゼしゃま、でし。僕の命を、懸けて、ジゼしゃまを、お守り、しまし。終生、ジゼしゃまに、お仕え、しましあー！」

ふうわりジゼの顔が紅に染まる。

動きにくい足では難しい誓礼に、よろけてしまった僕を、やさしくジゼが支えてくれた。

ジゼの手を、そつとにぎる。にぎりかえしてくれる指が、熱い。

「従僕の誓い、確かに聞いた。これよりリトを我が子息ジゼ・ディオ・ジェデイスの従僕とすることを、ルディア帝国、筆頭上位貴族、ゲオルグ・ディア・ジェデイスが承認する」

厳しい鍛錬をかさねたのだろう、ごつごつのゲオルグの指がジゼと僕の額にふれた瞬間、透きとおる青の光が祝福のように舞いあがる。ジゼの額に、青い魔紋が輝いた。

「おそろい」

微笑んだジゼが、僕のおでこをなでてくれる。

きつと僕の額にも、ジゼとおなじ青い魔紋が輝いているのだろう。

「これでジゼが危機にさらされたとき、きみに伝わるだろう。助けてやってくれ」  
ゲオルグが大きな手で、僕の頭をなでてくれる。

「あい！」

熱い頬で、僕はジゼを見あげる。  
しゃんとしたいのに、とろけるような、あまいよろこびに、ぶんぶんしっぽが揺れてしまう。  
「あるじしゃま」  
うるむ腫でささやいたら、ジゼが両手で顔を覆った。  
「……まあ、うん、色々がんばれ」  
ゲオルグがジゼの肩を、ぼんぼんしている。

## 第二章 最愛にお仕えるのです

最愛のジゼに、僕は従僕としてお仕えることになりました！  
獣人の僕が、ジゼのお傍にいてもいいなんて、楽園みたい。  
ジゼの執務室で、ジゼの近くに侍る僕のしっぽは、ぼふぼふです。

「どうした、リト」

やわらかな澄んだ声で呼んだジゼが、僕の頭をなでしてくれる。熱い頬のまま、従僕の務めを果たそうとジゼの足元を見た僕は、固まった。

「あ、あの、ジゼしゃま、お靴……」

ジゼの靴は、真っ白な編みあげの、ふくらはぎまである紐靴だ。めちゃくちゃ、かつこいい。  
しかし、ふとこに入らない！

ふあふああの耳としっぽが、ペしよりと垂れる。

「靴屋を呼べ。すぐにリトの靴をつくらせろ」

ジゼの鋭い声に、控えていた侍従も僕も跳びあがる。

「ち、ちがうの、でし。ジゼしゃまの、お靴を、僕のふとこで、あたたため、ましあ。ジゼしゃまが、ぬくぬくに、なゆように！」

懸命に話す僕に、かすかに口を開けたジゼは、両手で顔を覆った。

侍従たちの肩が、ふるふるしている。笑うのをこらえているらしい。

「じゅ、従僕の、おつとめ……僕、まちがた？」

泣きだしそうな僕の、ぺしよりと垂れた耳を、ジゼの指が、そうつとなでた。

「リトの気もちを、うれしく思う」

「……まちがた？」

泣いてしまいそうな目で見あげたら、ジゼの瞳がさまよった。

「……いや、うん、その……」

思いきり、まちがったらしい。なのに、なでなでしてくれるジゼは、とびきりやさしい。

耳としつぽが、ぺしよべしよになる僕に、最愛が、わたわたしている。

「ジゼさま、リトの指導はわたくしが」

声をかけてくれたのは、家令長セバだ。やわらかな朱色の髪が、つややかな夜色の家令長服によく映える。まだ二十代前半にもかかわらず、筆頭上位貴族ジェイス家の家令長を務める青年だ。髪と同じ朱色の瞳が眼鏡の向こうで楽しみにほそめられた。

「きちんと教えるように」

疑わしそうなジゼに、心外だと言いたげにセバがうなずく。

「もちろんです、我がきみ」

「……父上しか見えていないくせに」

すねたように唇をとがらせるジゼに、とろけるようにセバが笑う。

「ゲオルグさまの最愛であられるジゼさまは、わたくしの最愛でもあるのです」

ふいと目をそらしたジゼのまなじりが、ほんのり赤い。

ゲオルグとセバも、ゲオルグとジゼも、ジゼとセバも、とつても仲がいいみたいだ。

「なかよし、でしあ」

にこにこする僕の頭を、やさしくジゼがなでくれる。

セバの咳払いに、名残惜しそうにジゼの手が離れた。

「リトを頼む」

「御意」

胸に手をあてたセバが、うやうやしくジゼに膝を折る。まねっこした僕も胸に手をあて、ちよ

こつと膝を折った。

「ぎょい！」

しゃんと、がんばる耳の向こうで、ふあふあのしつぽが、ぶんぶんしている。

執務室にいる侍従たちが一斉にふるふるして、うつむいた。

両手で顔を覆うジゼの耳が紅い。……気のせいかな？

「では行こうか、リト」

執務室を出るよう、うながしてくれるセバの肩も、ふるふるしている。

立ち読みサンプル  
はここまで

「あー、うん。リト、やばいな」

執務室を出た途端、がらりと口調も雰囲気までもを変えたセバに、だめ出しされてしまいました。  
「や、やばい……?」

耳としつぽが、ペしゃりと垂れる。

——働きはじめで五分で、やばい僕……! せっかく、ジゼが僕を従僕にしてくれたのに……!  
「ご、ごめなしあ……!」

こぼれそうな涙をこらえる僕の後ろで、執務室の扉が開いた。

「泣かせたら殺す」

ドスの利いたジゼの声に、跳びあがった僕の涙腺が、崩壊する。

「ごめなしあ——!」

あふれた涙が止まらない。ちいさい身体に心まで引っぱられているみたいだ。

「り、リト……! ち、違う、リトを責めたんじゃ……!」

駆け寄ったジゼが、ふるえる涙の僕を抱きしめてくれる。

「泣くな」

ささやきが、ふわふわの耳にふれる。ぴくりと動いた耳が、ほわほわジゼの頬をなでた。

「……っ!」

真っ赤になったジゼに、さらにつよく抱きしめられる。

「あるじしやま」

そっと、ジゼの背に指をのばす。

最愛を抱きしめる夢のようなしあわせに、うっとりするしつぽが、ふうわり揺れる。

「……ああ、うん。リト、やばい」

セバのつぶやきが、僕の背に刺さる。

……色々だめらしいです。ごめなしあ!

執務室に戻るジゼを見送ると、セバは僕を近くにある従僕の控室に通してくれた。

BLゲームでは、セバはゲオルグとともにジゼルートで少しえがかれただけだった。立ち絵で並んだふたりがあまりにもお似あい、ゲオルグ×セバか、セバ×ゲオルグかで話題になった。前世の僕もふたりが出てくるたびに、どちらだろうと、わくわくしたのを覚えている。

ゲームでは『御意』しか台詞がなかったのに、三次元のセバは、仕事のできる厳格さと裏腹な、したたるような色気と艶がある青年だ。ほぼモブなセバでさえ、こんなにきらきらだなんて、すごい。

ぼかんとする僕と目をあわせようと、背の高いセバが、かがんでくれる。

「俺は、ジェディス家の家令長をやってるセバだ。よろしくな、リト」

白い手袋をとって差したされた手に、目をみはる。

獣人の手をにぎってくれる人間は、ジゼに続いて、ふたり目だ。

頬がほわほわ熱くなる。耳としつぽがふわふわ揺れた。